



円番さんたち
お腹空かせて
いるよねえ

そうね

すごく遅くなっちゃた
もう夜が明けそう
間に合うかしら...



自転車を降りて誰かが
中へ入ってゆくよ

ふきのつこの
あるところだ

大きな
建物の方へ
行きますよ



あれは
自転車の
ライトです

光が地面を
動いていく

あれ??
あれ??
何だろう



しん

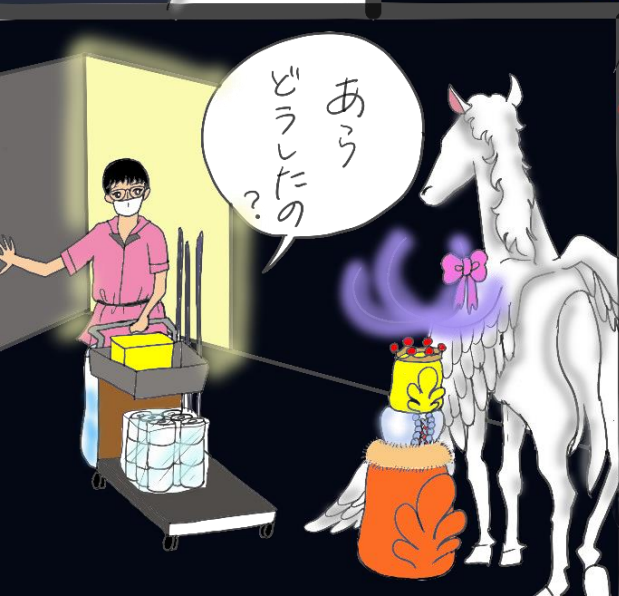
ええっ
ドロボウん!

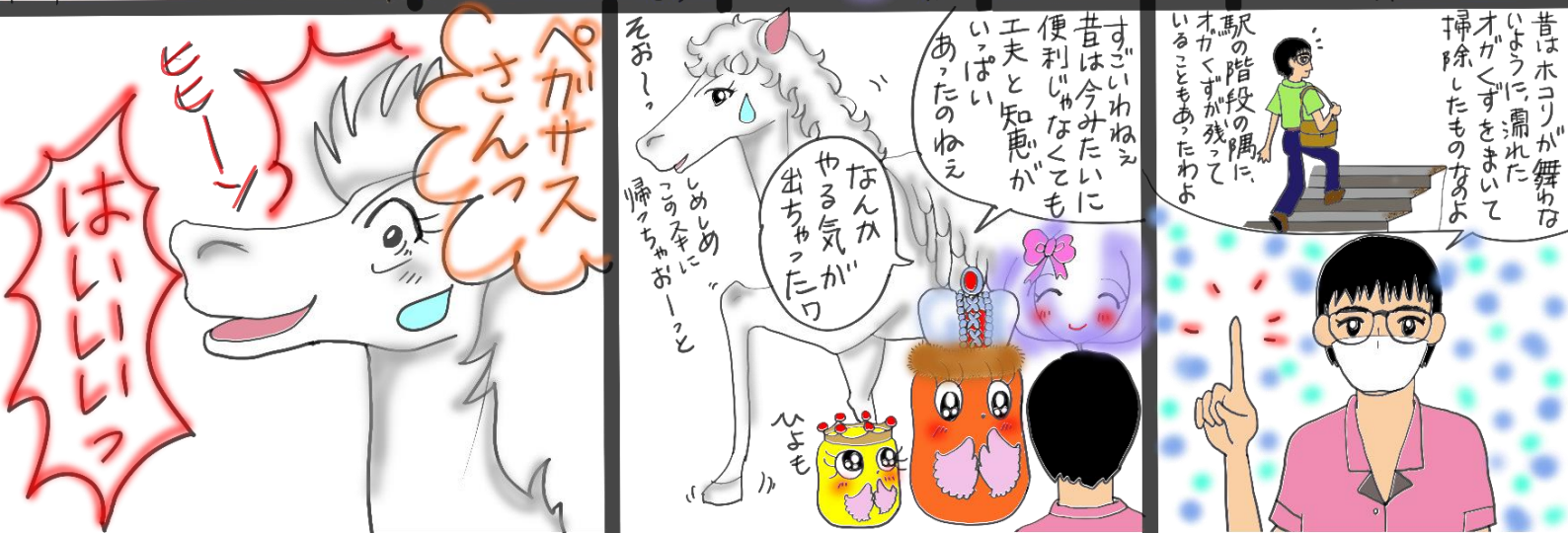
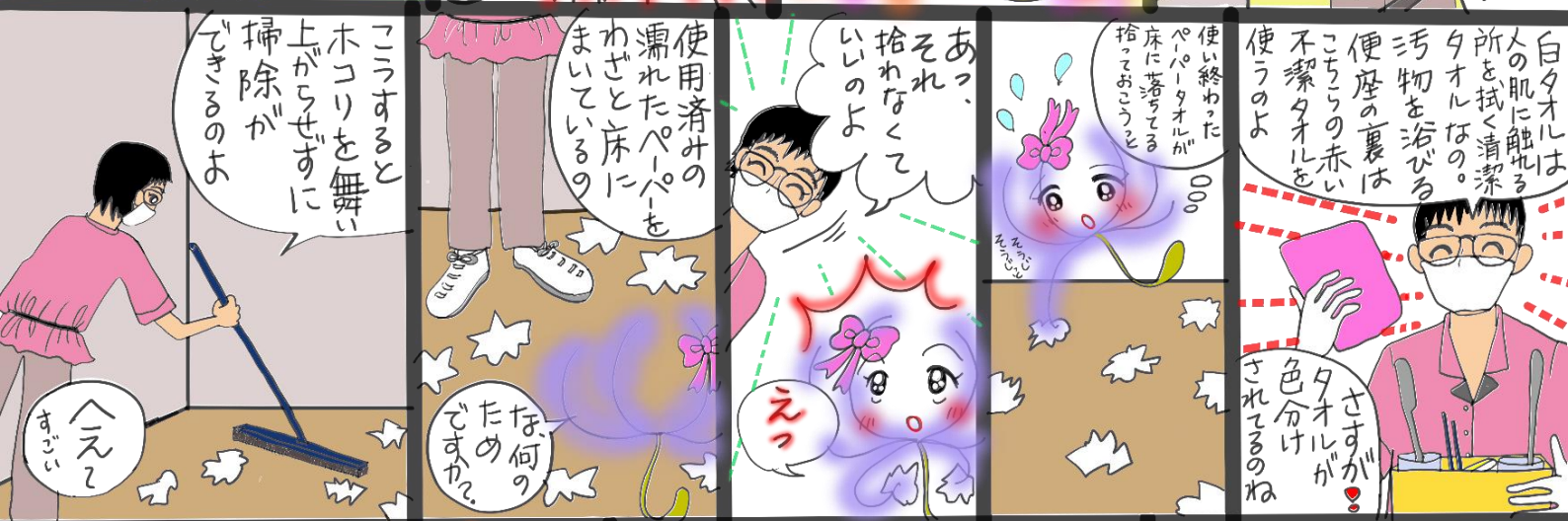
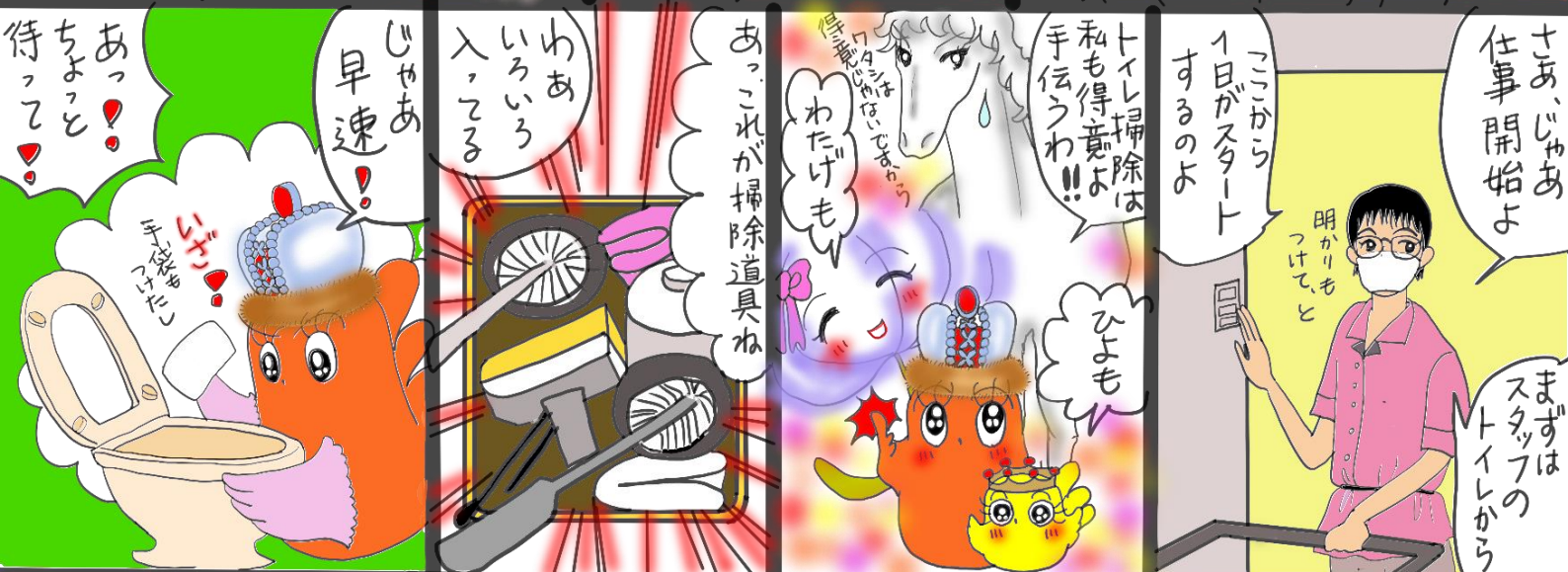
じゃあ...
じゃあ...
ドロボウ?!

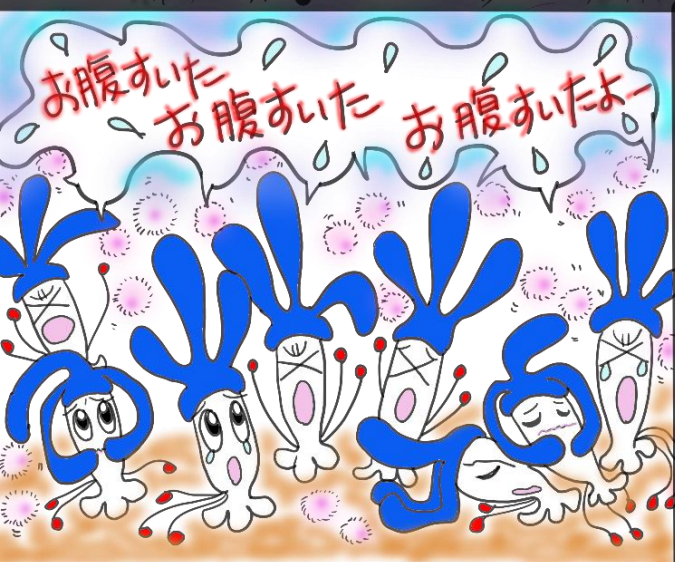
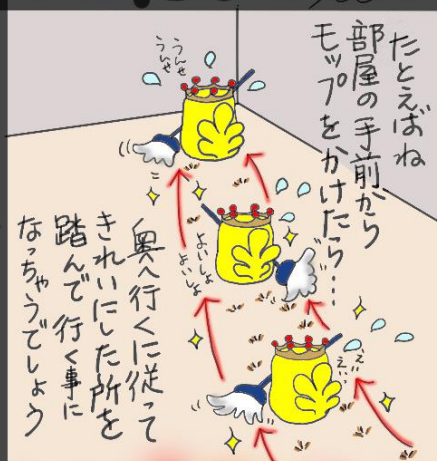
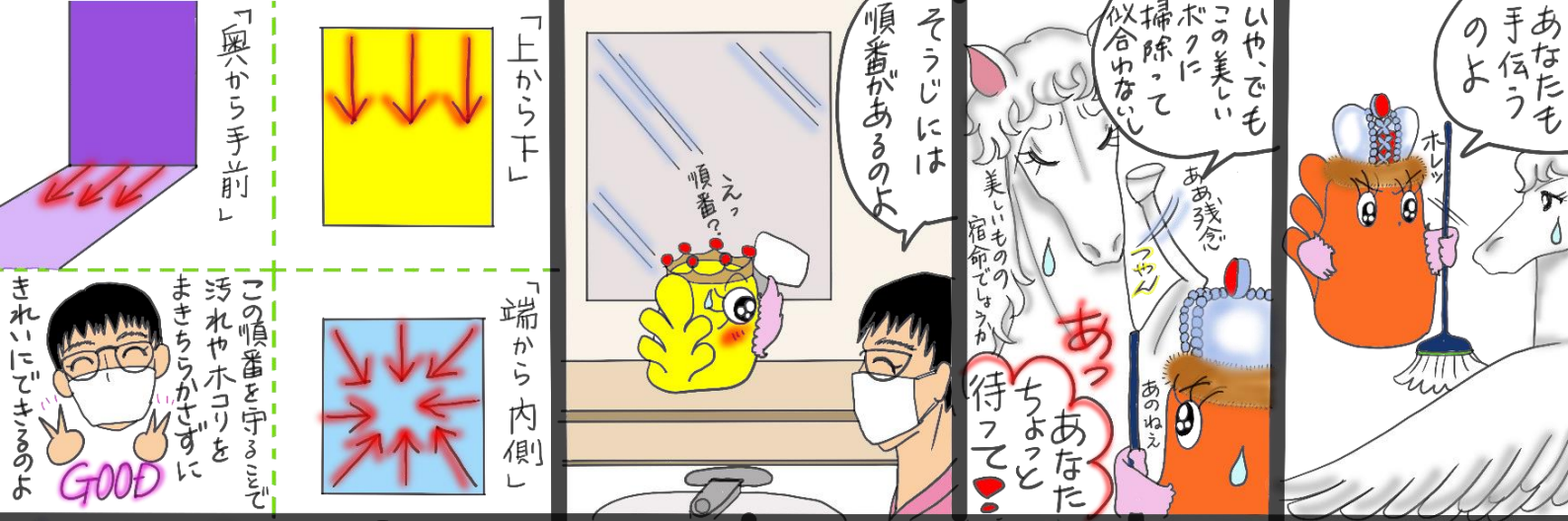


いくら
何でも早まき
るわ...

へえ...
スタッフさんて
こんなに早く
出勤するんだ







発行 2022年7月



医療法人社団 翔洋会

東京都練馬区大泉学園町8-24-25

2022年 大特集 翔洋会を支える人々

特集「翔洋会を支える人々」。今回は「清掃」にスポットを当ててみました。医療法人を継続させていく上で絶対に欠かさない、施設の「清掃」。けしてプラスを積み上げていく作業ではなく、マイナスを0(ゼロ)に戻す、というこの地味な業務を、ひたすら毎日繰り返す5人のプロフェッショナルたちがいます。私達が日々患者様や利用者様をお迎えして気持ちよく業務を全うできるのも、彼らによって整えられた清潔な環境があってこそ。今回はそんな彼ら5人の活躍ぶりを、ちょっとだけ覗かせていただきました。



始発バスも動いていない早朝、自転車で出勤する近藤さん(写真上)。掃除開始は職員トイレから(下)。



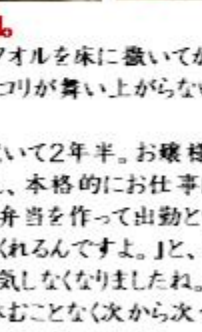
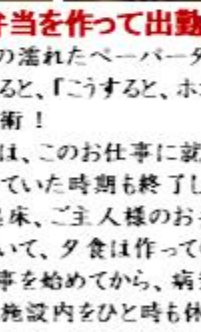
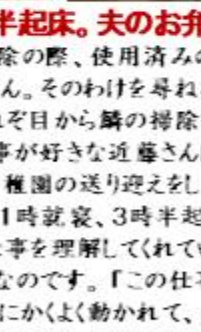
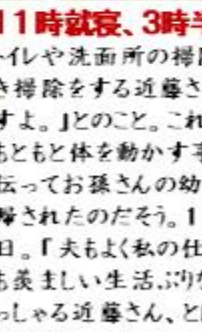
まだ暗い冬の早朝6時過ぎ。年末の冷え切った空気の中を大泉学園ふきのとうへと近づいてくる小さな灯り…。灯りは自転車のライトで、駐車場で止まると颯爽と女性が降りてきます。「おはようございます！」と元気な声。速足でまだ真っ暗なふきのとうへと、その日最初の一步を踏み入れる。彼女こそ翔洋会を陰で支える掃除のプロ。こけて毎朝、前日の汚れが残る施設内を丁寧に整え、新しい一日を迎える準備をしてくれるのです。

フロアに命を吹き込むように、灯りを点けていく。施設がいま、新しい一日をはじめようとしている。

自転車で出勤してきた女性は老健月〜木、午前中担当の近藤さん。仕事着に着替えた近藤さんは、まず今日使うモップの準備。丁寧にクロスを貼った後、昨夜から消毒液と洗剤に漬けてあった水拭き用のモップを洗面台の中で叩きつけるようにして洗浄、きっちり固く絞ります。やがて暗い廊下へと掃除道具満載のカートを押出した近藤さん、廊下を進むと職員用トイレの扉を開けました。「ここから一日が始まるんですよ」、と力強い開幕宣言！ いよいよ本日の掃除開始です！



トイレ掃除開始！①ゴミを集め②洗面所を綺麗に。トイレは便器内、便座裏をブラシ、スポンジで洗浄後③薬液を溶かした便座裏は赤い不潔タオルで④人の肌に触れる便座裏は白い清潔タオルで拭く⑤さらに便座裏は、消毒液を噴霧したペーパーでもう一度念入りに拭き直す⑥便器終了後、赤いトイレ用モップで床を水拭き



11時就寝、3時半起床。夫のお弁当を作って出勤。

トイレや洗面所の掃除の際、使用済みの濡れたペーパータオルを床に置いてから掃き掃除をする近藤さん。そのわけを尋ねると、「こうすると、ホコリが舞い上がらないんですよ。」とのこと。これぞ目から鱗の掃除術！

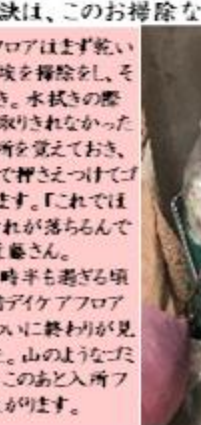
もともと体を動かす事が好きな近藤さんは、このお仕事に就いて2年半。お嬢様を手伝ってお孫さんの幼稚園の送り迎えをしていた時期も終了し、本格的にお仕事に復帰されたのだそう。11時就寝、3時半起床、ご主人様のお弁当を作って出勤という毎日。「夫もよく私の仕事を理解してくれていて、夕食は作ってくれるんですよ。」と、なんとも羨ましい生活ぶりなのです。「この仕事を始めてから、病気がなくなりましたね。」とおっしゃる近藤さん、とにかくよく動かれて、施設内をひと時も休むことなく次から次へと掃除を続けて行かれるのです。健康の秘訣は、このお掃除なのかもしれません。



8時を過ぎると、錠々としてケアフロアの職員が出勤してきます。「おはようございます！」の声がこちらで聞こえ、フロアが活気で満ちてきます。昼時間後、ここで振り広げられる利用者様とスタッフのたわいのないやり取り。仲間同士の無邪気な笑い。私たちが当たり前で享受している日常の陰には、毎日その場所を、早朝から丁寧に整えてくれる彼らの想いがあるのです。



写真左-フロアはまだ乾いたクロスで埃を掃除し、その後水拭き。水拭きの際はクロスで取りきれなかった汚れの場所を覚えておき、モップを足で押さえてゴシゴシ擦ります。「これでほとんどの汚れが落ちるんですよ。」と近藤さん。写真右-8時半も過ぎる頃には、一階ケアフロアの掃除もついに終わりが見えてきました。山のようなたまを片付け、このあと入所フロアへと上がります。





利用者様の顔が見られる居室の掃除。 モップは水をギリギリまで絞って、転倒事故を防ぐ。

今度はふきのとうの入所フロアへ行ってみましょう。入所フロアをメインに月～金で午前・午後の老健を担当する、こちらも女性で樋口さん。樋口さんの仕事開始もゴミ集めから。毎日毎日掃除をしても、ゴミは一日で溜まるもの。写真のようにカートいっぱい積みながらも、「平日はまだこのくらいで済みますが、月曜日はすごいですよ。日曜日が掃除の休日ですからね。」と慣れたもの。次は居室の掃除です。冬のやわらかい陽射しに包まれる居室。「居室は入所者さんの顔を見ながら掃除できるので好きです。「いつもきれいにしてくれて有難うって、感謝の言葉をいただくやっぱり嬉しくなりますね。皆様の転倒を防ぐためにモップの水気をギリギリまで絞ると、ゴミをゴミ箱まで入れるのが大変な方の為に、ベッド横にゴミ袋を付けるようにしています。」と、細やかな心配りも忘れません。



このトイレ掃除用タオルは赤と黄色。不潔と清潔に分け、肌に触れる部分は黄色の清潔用で拭き上げます。床を水拭きするモップも同様に2色で分けてあり、緑は清潔場所を、赤が不潔場所・主にトイレに使われます。

お風呂は高圧洗浄機。午後になると入所やデイケアの皆様が入浴を終えるため、お風呂掃除を始める樋口さん。2、3階入所フロアのお風呂を終え、最後は1階デイケアの大浴場にやってきました。



お風呂掃除で活躍するのが高圧洗浄機。一見掃除機のような外見のそれを、機関銃を構えるがごとく噴射口を床に向ける勇ましいその姿。スイッチを入れると凄まじい音と共に水が放出され、水圧で一気に汚れが弾き飛ばされます。大浴場の広い床面、お風呂の壁面床面と、樋口さんは自由自在に高圧洗浄機を動かして垢や汚れを吹き飛ばします。



高圧洗浄機で床やお風呂壁面の洗浄が終わったら、次は洗い場の鏡を一枚一枚丁寧に拭き上げます。排水口に溜まった髪の毛も、きれいに除去。カビ取りは夏場は週に1、2回。「夏場はカビがひどく、あっという間に広がるので、頻りにチェックしています。」こうしたひとつひとつの手間が、利用者様の快適な入浴に繋がっているのです。



臨床検査技師として47年。定年後家にいたら、「動けなくなっちゃうわよ」という、奥様の一言に一念発起。事実、この仕事を始めて体調が良くなった。

全曜土曜と午前中の老健を担当する榎林 治さんは、元臨床検査技師。病院職員として17年、民間の検査センターで30年と活躍されたのち、定年を迎えました。定年後、家でのおぼろげな生活に、「そんなことしていると動けなくなっちゃうわよ」と、奥様に言われて一念発起。社会奉仕活動の一環として、掃除の世界に入られたのです。「この仕事を始めて1年半ほどですが、まず体調が良くなりましたね。掃除って重いものを持ちたりするような重労働ではなく、程よい肉体労働なんですよね。」と、充実した毎日を送る穏やかな笑顔に。冒頭の近藤さんといい、やはり掃除の仕事は健康に繋がるのですね。いくら運動が体にいいと解っていても、家にいたらとてもこんなには動きません。仕事だからこそ、これだけ動き回れる。掃除って、実は良いところ取りなのかもしれません。



2階入所フロアの食堂を掃除する榎林さん。入所者の方から「いつもきれいにしてくださって有難う」の声。この言葉に励まされるのだそう。



長い廊下を端から端までクロスかけ。これぞ健康維持の秘訣。毎日掃除をしても、これだけのゴミが(左写真)！



感染防止の基本は整理、整頓、清掃、清潔。

「いまこんな時代ですが、私は昭和47年に結核療養所勤務となり、検査で毎日結核菌を扱っていましたが、決して自分自身にうつることはありませんでした。新型コロナウイルスだけでなく鼻や口から入ったあらゆるウイルスは、体から出るもの(唾液や排泄物)に含まれるわけですから、そこだけは気を付けないといけませんね。トイレを清掃する際、手袋が汚れたら即座に交換します」と榎林さん。長年臨床検査技師として貴重なご経験を積んでいらしたからこそ、むやみに感染を恐れなとおっしゃいます。「昔から言われる5Sは、「整理」「整頓」「鉄」「清掃」「清潔」ですが、5Sはその順番が大切です。まずは「整理・整頓」。必要なものと不要なものに「整理」し、不要なものは捨て、必要なものだけを「整頓」して並べる。「鉄」は、それを繰り返し叩き込む。それが終わった後「清掃」して、その状態を保つのが「清潔」。これが感染防止の基本であるという観点から、私は日々の仕事に従事しています。」と、榎林さん。そう、脳リハビリデイサービスはなみずき管理者、菅谷由紀子看護師も同じことを学んだと言っていました。感染予防の基本は、整理、整頓、清掃、清潔。医療法人で生きる私達は、肝に銘じておきたい言葉ですね。

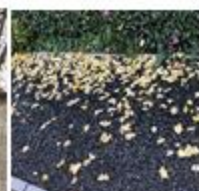
他界なされた両親の介護-社会奉仕活動の一環という気持ちで働いています、と榎林さん。「相洋会の職員の方は、いつも礼儀正しいです。」と高評価です！(嬉しい！)



外周整備の繁忙期は、秋から冬の落ち葉の季節。春夏は、あふれる緑を美しく整えて皆様をお出迎え。

昨年の12月から新しく翔洋会の外周担当となったのは、武藤さん。初仕事は時期柄、舞い散る落ち葉の掃除となりました。皆様もよくご存知のように、翔洋会は自然がとても豊かな環境。この時期、色とりどりに私たちの目を楽しませてくれる紅葉ですが、ひとたび地面に落ちた途端、邪魔ものとなってしまふ運命……。初出勤のこの日も、掃いても掃いてもキリがない落ち葉に、「こんなに大変だとは思っていませんでした！」と悲鳴をあげる武藤さん。

この日以降も駐車場には90リットルゴミ袋何十袋分にもなる落ち葉が連日容赦なく降り注ぎ、武藤さんを悩ませ続けたのでした。あれから3か月。今朝も外回りを整えていく武藤さんの周辺は、葉っぱ一枚、枝一本なくスッキリとしています。外周は利用者様が最初に出会う翔洋会の顔。武藤さんのおかげで第一印象はバッチリですね。



秘密兵器「ブロワー」を操作する武藤さん。風で落ち葉を飛ばし集める



冬晴れの空に黄色がはく映えるイチョウの木。この木が光輝になるまで、もう少し！武藤さんの闘いは続いた……

病院清掃のプロフェッショナル「ホシカワ」でキャリアを積んだ、この道27年の大ベテラン。

最後にご紹介するのは、クリニック土曜担当の山本正信さん。山本さんはこの道27年の大ベテラン。ご紹介してきた橋本さんや皆様も、山本さんのご指導のもと翔洋会の仕事を始められました。

現在、翔洋会が清掃をお任せしている(株)ホシカワは本社を東京お茶の水におく、昭和38年創業、順天堂大学病院の清掃から始まった病院清掃のプロフェッショナル。山本さんはこの会社で、長年ビルメンテナンスの仕事をしていました。定年後、翔洋会の清掃前職者が体調不良で退職したのを機に現場を担当するようになりました。清掃会社で長年活躍していただけあって、山本さんはたくさんの資格をお持ちです。ボイラー技士、ビルクリーニング技能士、清掃作業監督者、ビル管理士、警備員指導教育責任者、空気環境測定実施者等々……「あれ？ 幾つ持ってたっけな？」とご本人がわからないほどで、その殆どが国家資格となっています。

ちなみに皆様「掃除の資格」といいますが、その試験内容をご存知でしょうか。山本さんに伺ったところ、「椅子と机のある6畳ほどの部屋を、15分以内にモップで掃除し、ワックス前のブラシをかけ、その後ワックスをかける。時間がないからと、焦って粗になったら不合格。」とのこと。15分ってあっという間ですよ……。他にも窓拭きや、カーベットの染み落としといった試験もあって、かなり難易度高めなのです。



こびりついた汚れは丁寧にへたで落とす。気付いた時に取らないと、汚れは固定してしまうので要注意。「こういう仕事をしているから、どこに行っても床が気になるんですよ。デパートに行っても靴の跡が気になって、ついゴシゴシしたくなる。」と笑っておっしゃる、山本さんは筋金入りのプロ掃除師。

上から下。端から内側。奥から手前に。掃除の順番には理由がある。

前ページでもご紹介した緑と赤に色分けされた清潔・不潔モップですが、実は床を拭くのは裏側のみ。表は白く綺麗なまま。これはなぜ？「モップは毎回使用後に洗剤で洗浄し、消毒しています。特に表を使ったからといって裏を使うより綺麗になるわけではない。それよりも清掃中の見た目も重要。真っ黒に汚れたモップで掃除するのは、見た目にも良くない。」なるほど、思わず背筋が伸びる掃除の美学。またモップ使用中は、トレットペーパーの入っていたビニール袋を再利用

し、カバーとすることで、どこに置いていてもフロアを菌から守ることができる(写真)。これも山本さんのアイデアです。

「掃除は上から下。端から内側。奥から手前に。この順番には理由がある。」と山本さん。「埃を外側へ広げないよう。掃除し終えた場所を汚さないように。皆さん、ご家庭でも自然にやっているとすけれどね。」

冒頭でご紹介した、濡れたペーパータオルを床に敷いて掃き掃除をしていた近藤さんの話をすると、「昔、JRの階段の隅におが屑が残っていたでしょう。あれはね、濡れたおが屑を敷くことで埃を舞い散らせないようにして掃除していたんですよ。濡れペーパーを敷くのはそれと同じ理由から。」と説明してくださいました。



モップカバーにトレットペーパーの包装ビニールを再利用。アイデア豊富な山本さん。



「一日の始まりを、気持ちよく迎えてもらいたい。」

彼らのこの願いのもと 私たちは整えられた場所に、新しい一日を築いていく。

山本さんはホシカワ本社のあるお茶の水にお住まいのため、電車もバスも始発で出勤。数年前の大雪の日、駅から約一時間をかけて翔洋会まで歩いていらしたそう。「ひさしぶりに雪の中を歩いて、楽しかったよ。」と、笑顔でおっしゃる山本さん。「ここは都心に比べると、空気がきれいで気持ちがいいですよ。ふきのとうからは富士山も見えらね。」山本さんはクリニック外来、一階部分のお掃除を、「一日の始まりを、清潔な場所で気持ちよく迎えてもらいたい」という思いをこめてなさるそう。まだ暗い早朝に出勤し、クリニックオープン時には仕事を終了させ、私達の目に触れることのない彼ら。そんな彼らの思いがあって、私達は整えられた場所の上に、新しい一日を築いて行かれるのだと有難く思うのです。



杉山尚子施設長、全老健協会表彰受賞者代表に。



「老健」2022年1月号より。受賞者代表として全老健会長の東富太郎氏とともに。

全国老人保健施設協会機関紙の「老健」。この「老健」の2022年1月号に、我らがふきのとう施設長、杉山尚子先生が「令和3年度公益社団法人全国老人保健施設協会表彰」を受賞された様子が掲載されました。これは「介護老人保健施設の代表者として15年以上精勤し、本協会及び支部活動並びに地域の活動において功績が顕著であるもの」に贈られる賞なのです。杉山先生は今年で翔洋会勤続24年。辻正純理事長の日本大学医学部の後輩という縁(同じ卓球部でもあったそう)で、開設時から老健施設長に就任。以来、ふきのとうの顔として利用者様からもスタッフからも信頼され、慕われ続けていらっしゃるのは皆様よくご存知のことと思います。また老健施設長として活躍なさる傍ら、消化器医師として辻内科循環器科歯科クリニックで木曜日に診察をされ、消化器系の検査(腹部超音波、上部内視鏡)も担当されています。いつも笑顔を絶やさず、すれ違うと気軽に話しかけてくださる先生。これからもうずっとこの笑顔で絶やさないでいただきたいと、心から思います。先生、おめでとうございます。